

# 国際交流における児童・生徒の主体性を育むための英語教育のあり方

## 国際交流を効果的に進める事前・事後指導のあり方

小 関 晴 彦 聖ウルスラ学院英智小・中学校

### 1. はじめに

グローバル社会到来にあたって、子どもたちに求められてくる力として、「コミュニケーション能力」「論理的思考能力」「異文化理解能力」「自己理解力」などが挙げられる。これらの能力を身につけるためには異文化交流が極めて有効であると考え、本校では、学年児童・生徒の全員参加を原則とする海外研修旅行を実施している。小学校6年生では3日間、日本滞在中の海外留学生と交流をする、Global Campを実施、9年生（中学3年生）ではオーストラリア・ケアンズで、4日間のホームステイ及び現地の中高等学校と学校間交流学習を行っている。これら2つの学年行事では、児童・生徒たちが主体的に相手国の言語・文化を知り、自国の文化を伝えていくという意欲・態度を育てていく必要がある。そのため、本校の児童・生徒は、交流相手に日本の文化を英語で発表することになっている。この活動により、自国文化の理解を深め、異文化を理解する上での基本的な知識、見聞を身につけさせる。また日本文化を紹介する上で必要とされる実践的な英語学習を、当該学年はもとより他学年の英語指導にも結びつけていくことを目標とする。近年、アクティブラーニングの必要性が言われているが、以上の取り組みは自ら課題を見つけ、解決していくことが求められる良き学修と確信している。本研究では、英語で発表するための事前学習のあり方、発表したことによって得た成果や課題を子どもたち自身に自覚させることができる事後指導のあり方を、9年生のオーストラリア研修旅行の実践をもとに考察した。これによって、子どもたちがグローバル社会で必要とされる能力を向上させることができ、さらに今後の学習のモチベーションになると考えている。

### 2. プレゼンテーションの際に生じた問題点

本校9年生の学校間交流は昨年度に開始した。プログラムの内容はセレモニー、校舎内見学、授業体験、レクリエーション、そして本校生徒による日本文化の発表とした。昨年度はパワーポイントを使い、写真や動画などを用いて相手校の生徒に発表した。生徒たちはスライドを駆使し、英語の練習をしながら一生懸命伝える努力をしており、一定の成果も見られた。しかし課題として以下の2点が見えてきた。

1点目は、生徒たちの緊張が予想以上に大きかったことである。6人のグループではあったが、パワーポイントを用いての発表では、生徒は相手校生徒20人程度の前で発言することになる。日本語で発表するときでさえ緊張するのが普通であり、増して英語で発表することは相当のプレッシャーがあることが感じ取れた。

2点目は、目線がスライドにいきがちになったことである。パワーポイントによる発表はスライドに沿って発言することが多くなる。内容も比較的多いため、生徒たちは発表原稿を用意し、目線は発表原稿とスライドの往復となってしまった。その結果、聞き手である相手校の生徒をほとんど見ていない生徒もいた。発表が一方向的になったことで、相手校の生徒の反応があまりないグループも見られた。

### 3. 前年度の反省点を考慮しての発表形態の変更

これらの反省点をもとに、発表の形式と事前準備の方法を改善するための検討を行った。

まず1点目の、生徒に対するプレッシャーを軽減するために、発表をパワーポイントによるプレゼンテーションの形式から、模造紙のポスターによる「ポスターセッション」形式とした。そして相手校の生徒もグループに分かれてもらい、自由に各セッションを回ることができるようにした。1グループが相手校の生徒全員に発表するのではなく、聞き手を少人数にすることにより、本校の生徒の緊張を軽減することができると考えたためである。併せて、原稿の内容もあまり難しくない英文を使うことを原則とした。これにより生徒がレベルの高すぎる英語を極力使用せず、ポスターの絵や写真をもとに説明する、自分が言える範囲の英語で説明するという状況をつくることを心がけた。

また2点目の改善策として、「体験をしてもらう時間」を加えた。各グループの持ち時間は前年度と同じ20分としたが、ポスターを用いての発表は10分にとどめ、残りの10分はそのテーマに関連することについて、相手校の生徒と体験できるプログラムを考えることとした。これにより、パワーポイントによるプレゼンテーションの時に比べ、より近い距離でのコミュニケーションをとることになり、相手生徒との関係がより緊密になるだけでなく、交流がより活発になると考えた。

#### 4. 事前学習—英語力、発表力を高めていくために

##### 4-1 発表する内容の構築

上記の発表形態を基本として、生徒たちはグループごとに調べ学習を行い、オーストラリアの生徒が興味を持ちそうな内容について議論をしながら、それぞれのグループごとに日本文化のテーマを設定し、相手に体験してもらうことを決定した。次にポスターの作成を行った。効果的な写真や絵、発表する上で重要な英単語などをどう盛り込むかを踏まえ、紹介する内容の精選、その順番などを決めていった。最後にポスターの内容に基づいて原稿を作成した。内容によって、英語で説明するのが難しいと判断した場合には原稿を作り直し、生徒が知っている単語やシンプルな構造の英文を使って説明できるようにしていった。

##### 4-2 英語の訓練

###### ①スライドを使つての発表練習

英語の授業では、生徒たちがスピーチをする際、原稿を作らず、内容に関係する画像を数枚用意し、その画像をもとに英語で発表するという機会を多く確保した。特に英語が苦手な生徒は、発表の際に原稿から目が離せない場合が多い。自分が言いたいことに沿って画像を用意し、それを発表者自身が見ることによって、話す内容やその順序などを、原稿がなくても知るができる。また説明する上で必要な、かつ暗記しづらい単語はスライドに示してよいこととした。これらの材料をもとに生徒たちは自分の頭の中で英文をつくり、発言をする訓練を行った。テーマは「夏休みにしたこと」などといった、平易なものが多かった。この活動で、姿勢や視線の向け方、声の大きさなどの発表する上で基本的な技能を向上させること、そして何より原稿がないことによる不安を克服するという目標を立てていくことができた。

###### ②インターネットを介したオーストラリアとの交流授業

オーストラリア・メルボルンにある学校の日本語教員と協力し、インターネットを通じて互いの学校の生徒同士が交流するプログラムを行った。相手校は St. Joseph school という小・中学校の併設校であり、小学校低学年より中学校まで日本語の学習を行っている。リアルタイムで交流を行うため、オーストラリアは日本と時差の少ないという点で交流授業に適している。(1~2時間程度) 交流授業のスタイルは、1台のパソコン(時間によっては2台)の前にそれぞれの生徒が座り、会話をするというものであった。基本的に、交流授業前半が相手校生徒の日本語による発表や質問で、本校の生徒がそれを聞いて反応する時間、後半が本校の生徒の英語による発表や質問の時間とした。内容は自己紹介に始まり、スキットの発表などを行った。このプログラムを行うにあたっては、授業変更の必要性、時間制限、機器のトラブルなどの問題を克服する必要がある。しかし、海外の同級生と話すことができるという生徒の喜びは大きいよう

に見えた。また、生徒たちは会話をする上で、自己の課題も把握していた。大きな声で話すことや相手に反応することなどは、実際に相手を目の前にすると緊張感によって、普段接している ALT とのようにはできない様子であった。その意味でも有意義な時間となった。

#### 4-3 発表の訓練

オーストラリアへ出発する前の事前学習において、ポスターセッションのリハーサルを2度行った。第1回目のリハーサルではポスターや原稿が完成して間もなかったこともあり、原稿を読みながら発表する生徒がほとんどで、ポスターを十分に活用していなかったグループも見られた。教員や他グループの生徒から、話す内容や話し方に関して助言を行った。第2回目のリハーサルにおいてはその多くの点に改善が見られた。なお、リハーサルでは主に、①内容のわかりやすさ②目線・ジェスチャー③英語の発音・イントネーション・流暢さ④声の大きさについて評価、指導を行った。

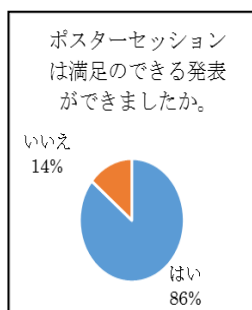
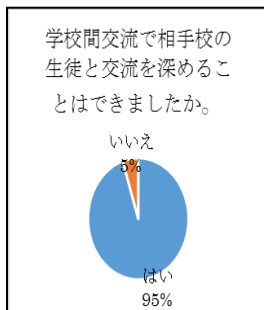
#### 4-4 オーストラリアに関する予備知識

オーストラリアに滞在中、ホストファミリーや学校間交流をする相手校の生徒とコミュニケーションを行っていく上で、生徒が知っておいたほうが良いと思われるオーストラリアに関する知識について講義を行った。具体的には、①マナー②生活習慣③人種④宗教⑤地理⑥通貨⑦教育システムなどについてであった。

### 5. 実際の発表

オーストラリアで相手校の生徒を目の前にして英語で発表する直前まで、生徒たちには緊張している様子が見られた。しかし、同じ教室で4グループが同時に発表する形態であったため、プレッシャーをあまり感じない雰囲気の中で発表を始めることができた。むしろ周囲の発表を横目で見ることでも励みにもなっていた様子も見られた。そのような雰囲気から表情にも硬さがなくなり、それを見た相手校の生徒にも自然と笑顔が見られた。発言しているときの目線やジェスチャーなどもよく意識しており、英語の内容が多少わかりづらくともポスターの絵や道具が役に立ち、相手はよく理解しているように見えた。後半の「体験してもらおう時間」では、予想以上に互いの生徒の距離が近くなり、本校の生徒たちは自信を持ってやり方などを教えている姿が見られ、拍手が沸き起こることもあった。このように、大半の生徒が充実感を持ってこのプログラムを終えることができた。

テーマ：日本の○○		
日本の礼儀	日本のトランプ	日本のアニメ
日本の遊び	日本の漢字	日本の正月
日本の祭り	日本のあやとり	日本の昔の遊び
日本の便利グッズ	日本の伝統行事	日本の顔文字
日本の服装	日本の文房具	日本の常識



### 6. 事後学習—成果と課題を自覚するために

本校では、全校児童生徒がポスターセッション、プレゼンテーションを行う企画が昨年度から始まり、そこで生徒たちはオーストラリアでの発表を報告した。発表は2部で構成し、1部はオーストラリアの現地校で行った「日本文化について」の英語のポスターセッションの再現、もう1部は各班の班長による「現

地校語学研修の実践報告」の日本語でのポスターセッションである。

まず、「日本文化について」の各クラスの代表グループ（日本の祭り、トランプ、顔文字）による発表では、現地校でのポスターセッションを再現した。しかし、そのまま発表するのではなく、現地での反省点や課題を改善し、より良いものになるよう練習した。生徒にとっては、ネイティブスピーカーに英語で発表するときとは違った緊張感があったようである。また、発表の際は暗記ではなく、自分の言葉で伝えようという意識も感じられた。次に「現地校語学研修の実践報告」の日本語のプレゼンでは、現地校で行ったポスターセッション班の各班長が集まり実践報告を行った。その内容は、反省点や課題を自分たちで分析・発見し、今後どのように生かしていくのかをまとめたものである。たとえば、相手に伝えることの難しさ、コミュニケーションの大切さが挙げられていた。聴衆とコミュニケーションを取りながら発表を進め、質問にも丁寧に答えていた。また2回のリハーサルを通して、他学年の発表や、生徒や先生方からのフィードバックをもらった。それらは良い刺激になり、客観的に自分たちの姿をとらえ、修正していく機会にもなったようだ。



## 7. 成果と課題

授業で練習する英語と、実際に話せる英語は異なる。ALT や教科教員が英会話の指導をよくしてきたものの、初対面の相手を目の前にし、顔を見ながら英語で話すことは依然として難しいものである。しかし、事前学習を通して英語で発表する練習を重ね、調べ学習で自国の文化を知り、どのように相手に体感してもらえるかを考えるなどの準備を入念にしていた結果、生徒たちは相手校の生徒を目の前にして話すことの喜び、そして言いたかったことを言えたときの達成感を味わうことができたように感じられた。生徒たちの自己評価では、コミュニケーション力が向上したというコメントが目立った。外国語を使って交流をすることで、もっと英語を話せるようになりたいという意欲の他、言語だけがコミュニケーションの手段ではないということも学んでいた。ジェスチャーや表情も重要であり、それらの伝達手段を用いながら、互いの感情を共有し、理解し合えることが大切であると体感することができたことが大きな成果である。今後の課題として以下の2点が挙げられる。

1点目は、日本文化を英語で発表することについて、どのように発表を完成させていくかという目標が漠然としていたことである。生徒たちにとって、外国人に対して英語で発表するという場面を想定することは難しかった。さらに聞き手となる同年代の外国人と対峙したこともないため、相手が日本についてどの程度知っているかを予測することも難しかった。無意識に「日本人としての常識」の範疇で考えてしまうこともよく見られた。そのため、次年度は自分たちの先輩が発表したビデオを見て参考にさせるなどの対策が必要であると感じた。

2点目は、情報の収集、ポスターの作成、原稿の作成、発表の練習など、準備に多大な時間を要したことである。グループでの取り組みであることを活かし、情報の収集やポスターの作成をより効率的に行わせていく工夫が必要である。そして英語で発表をするために必要最低限、日本語での発表の知識と技術が必要とされてくる。そのため、9年生になる前までに日本文化の発表を日本語で発表する機会を持つなど、より早い段階からの準備が必要であると考えられる。